

原 著

「生」と「死」の教育に対する教師の意向に関する検討 — 中学校教師について —

片 桐 史 恵*¹

要 約

本研究は、中学校教師を対象とし「生」と「死」の教育の認識について調査を行い、その対応について明らかにすることを目的とした。具体的には、中学校教師153名を対象に質問紙調査を行い「生」と「死」に関する教育の必要性、教育開始時期、担当教科または教科外、教育カリキュラムの内容などについてそれぞれ検証した。その結果、中学校教師の考える「生」と「死」に関する教育の望ましい開始年齢については、「生」の教育の望ましい開始年齢は、6歳から8歳と回答した教師が28.1%と最も多く、次いで9歳から11歳と回答した教師が23.5%であった。「死」に関する教育の開始年齢としては12歳から14歳が望ましいと回答した教師が最も多く22.2%、次いで9歳～11歳と回答した教師が21.6%であった。また、中学校教師が「生」の教育を開始した後に「死」の教育を行うことを望んでいると推察され、「生」と「死」の教育の新たな在り方の可能性を示唆する結果である。

1. はじめに

近年、我々を取り巻く死の諸問題はますます複雑化する様を呈している。この複雑な現代社会を生き抜くために、各個人が「生」と「死」をどのように捉え考え自らの価値観をも多層なものにするかが問われている。現実の多層性は心の多層性に対応し、その層を突き詰めていくことこそが、現実の社会状況の深層を認識し理解することにつながるのではないか。大人のみならず、子どもをとりまく犯罪や自殺の問題は、多角的視点で検討する必要がある。これは、死生観の構築の問題ともいえるが、死生観の構築について Katagiri¹⁾は、直接的には死別体験が影響すると考えられるが、長期的には家庭、学校や地域といった集団における様々な体験を通して確立されていくものであると考えている。そこで第三者との関係が密になる集団としての学校教育、特に小学校、中学校における「生」と「死」の対応について考えてみたい。

小学生を対象にした「生」と「死」の教育に関しては、井上²⁾、荃津³⁾、大曲⁴⁾、山田⁵⁾の報告がある。井上²⁾は、低学年児にはペットのような身

近な教材を使用し、「生」や「死」を考える機会を与える必要があると述べ、大曲は、2年生児では「生きものの死」の体験が、6年生児では「身近な人の死」の体験が死の意識と関連すると述べている。山田⁵⁾は、命に関する授業で自分の命と他人の命が関係していること、人間の命と動植物の命とも関係していることの理解を発展させることが重要であると論じている。荃津³⁾は、小学生を持つ親が子どもと「死」について話すことの意識と実態について調べた。その結論として子どもを取り巻く学校や医療の現場など社会全体で子どもと「生」と「死」の問題を共有していくことが大切であると主張している。

「死」を考え始める青年期に移行する子どもの中学校の教育に関しては、「生」との関連で「死」に関する対応は避けて通れないと考えられる。中学生を対象にした「生」と「死」の教育に関しては、山梨⁶⁾や仲と丸山⁷⁾の報告がある。山梨⁶⁾は脳死・臓器移植について社会科と保健科で取り組んだ授業実践の報告の中で、教科枠が強い中学校での学習にあって、教科クロスの設定（教科を越えたテーマの設定）の受容、学際的、総合的なテーマについて生徒

*1 中部学院大学短期大学部 幼児教育学科

(連絡先) 片桐史恵 〒501-3993 関市桐ヶ丘2丁目1番地 中部学院大学短期大学部

E-mail: fumie@chubu-gu.ac.jp

の学ぶ意欲があることを明らかにした。しかし、それぞれの科目の特性を十分に活かすまでには到達できなかったと述べており、さらに複数の教科の乗り合い型のプログラムの開発が必要であると述べている。

仲と丸山⁷⁾は、中学生226名を対象に「死に対する態度」についての質問紙調査を行っている。理不尽に命を奪われた犠牲者が主役のアート展である「ミニ生命のメッセージ展」を見た後に、交通事故で息子を亡くした母親の話を書くという取り組みを行った前後に死生観の変化がみられるかの分析を行っている。自他の命を大切に思う考えや生に執着する考えの因子が得られたと示している。また、取り組みの事後の方が、命を大切に考える考えが重視されるようになったとしている。このように「いのちの教育」の重要性を指摘している。

小学生及び中学生を対象にした山崎⁸⁾は保護者も加えて脳死・臓器移植に関する意識調査を試みた。その結果、脳死・臓器移植の教育が必要なこと、「生」と「死」の教育は、家庭、学校、地域社会の連携によって行われる必要があること、「生」と「死」の教育を行う際、子どもの死に対する不安や恐怖心に配慮し、生きることの意味や希望・夢といったポジティブな意思や感情を育てることも目標に含めることが必要であることなどを明らかにしている。清水^{9,10)}は一事例の縦断的記録資料をもとに子供の自己意識の発達過程と死生観の形成過程との関わりを論じることを試みた。杉本¹¹⁾は幼児期から思春期にある子どもが、生きること、死ぬこと、生命についてどのように認識しているのか、その発達的变化を明らかにするために3歳から15歳の子ども89名を対象に「生」と「死」に関する10項目についての聞き取り調査を実施した結果、死の概念の理解がほぼ獲得されるのは6～8歳での年代であること、死別体験のある子どもは6～8歳で50%となり、9～15歳では80%を越えたことなどを明らかにした。また、祖父母との死別体験が「生」と「死」に深い思索をしたことを語り、自分の生きる意味や生き方を考えるきっかけとしていた点も指摘している。9～15歳の子どもは、「体の機能の停止」「死の非可逆性」「死生観」の回答の中で、死後の世界や魂といった霊的・精神的回答と「生まれ変わり思想」を特徴とし、特に12～15歳は「生まれ変わり思想」が顕著であったと述べている。加えて、「生きている実感」は、うれしいとき、楽しいときといった「幸福感」と「生きていることの実感」を感じたときであったこと、「死の衝動」は、6～8歳からみられることなどを明らかにしている。大仲¹²⁾は、小学生、中学生、高校生さ

らに教員を目指す大学生に「生」と「死」に関するアンケート調査を行った。その結果、小学校時代や中学校時代の自然体験や動物の飼育体験が生命意識を深めることにかかわりがあることを確かめた。特に、人や動物の「死」に遭遇する体験が最も重要であることが分かったと述べている。教科指導においても「死」に関する体験を伴った指導を一層重視することにより、生命尊重の育成が図られることを明らかにしている。近藤¹³⁾は、「いのちの教育」の実態調査で、小中学校共に実践を行っているものの「生」と「死」の扱いが少ないことを明らかにしている。

片桐¹⁴⁾は大学入学以前の学校教育における死生学の取り扱いについて大学生を介して検討した。大学生および短大生105名の50%以上の学生が「生と死」に関する授業経験なしと回答していた。学習指導要領において「生徒らの生きる力」の育成に関しての記載があるにも関わらず半数以上の学生が授業経験なしと回答していたことは憂慮すべきである。また、片桐¹⁴⁾は、死を考え始めた時期が13歳であることも明らかにしており、これは、中学校1年生の時期から自らの「死」及び他者の「死」について考え始めたことを意味する。小学校と中学校の各学習指導要領^{15,16)}に示されているように、今後学校現場において「生」と「死」についてより具体的に取り上げていくことになるわけであるが、教師自身の「生」と「死」の教育に対する意向に焦点を当て検討したものはほとんど見当たらない。学校教育における教師の「生」に対する対応と「死」に対する対応の検証が求められる。そこで、「生」と「死」の教育の実践の検証と教師の意向についての実態調査をする必要があると考えた。本研究では中学校教師を対象とし「生」と「死」の教育の認識について調査を行い明らかにすることにした。

2. 方法

2.1 調査協力者

G県S地区の公立中学校5校を選び、各中学校教師のうち調査の協力が得られた教師は、153名（男性97名、女性55名、性別不明が1名）であった。年齢は20歳代36名（男性22名、女性14名）、30歳代50名（男性38名、女性12名）、40歳代24名（男性15名、女性9名）、50歳代・60歳代41名（男性22名、女性19名）であった。なお年齢不明が2名であった。

2.2 調査内容

質問紙調査として10問題で構成した。問1～4は回答者の属性として、所属、性別、年齢、職位などについての記載を求めた。問5～9は「生」と「死」に

関する教育の必要性、教育開始時期、担当教科または教科外、教育カリキュラムの内容などについて選択肢を用意した。問10は生と死の教育についての意見など自由に記述することを求めた。

2.3 調査期間と調査手続き

2019年11月に調査用紙は5校の代表校長により各学校長を経て教師に配布され、2019年12月中に学校ごとに回収され調査用紙は代表校長のもとに集められた。

2.4 調査データの処理

調査データはMicrosoft Excelを用いて集計処理を行った。

3. 結果

3.1 中学校教師の「生」と「死」に関する教育の必要性の認識

「生」と「死」に関する教育の必要性については表1に示した。表によれば、「生」と「死」の教育が必要ないと回答した教師は皆無であったが、「どちらともいえない」と回答した教師は「生」について9.2%、「死」について21.6%であった。しかし、「生」

の教育が必要であると回答した教師は90.8%、「死」の教育が必要であると回答した教師は78.4%であった。

「生」と「死」に関する教育の必要性の程度については表2に示した。表によれば、「生」の教育が「とても必要」と回答した教師は48.2%、「必要」と回答した教師は51.8%であった。「死」に関する教育が「とても必要」との回答は40.8%、単に「必要」との回答は59.2%であった。

3.2 中学校教師の属性との関連でみた「生」と「死」に関する教育の必要性の認識

3.2.1 性別

表3には、「生」と「死」の教育の必要性を男性教師と女性教師からみた結果を示した。表によれば、「生」の教育の必要性については、男性教師が90.7%、女性教師が90.9%とほぼ同じ割合であった。

「死」の教育については、男性教師が80.4%、女性教師が74.5%で、若干の差が認められた。「どちらともいえない」については、「生」が男性教師9.3%、女性教師9.1%、「死」が男性教師19.6%、女性教師25.5%であった。「生」については男性と女性の教

表1 中学校教師の「生」と「死」に関する教育の必要性の認識

	「生」	「死」
必要	90.8(139)	78.4(120)
どちらともいえない	9.2(14)	21.6(33)
必要ない	0(0)	0(0)

(注) 表の値は%、()内の数字は人数、性別不明1名を含む

表2 中学校教師の「生」と「死」に関する教育の必要性の認識の程度

	「生」	「死」
とても必要	48.2(67)	40.8(49)
必要	51.8(72)	59.2(71)

(注) 表の値は%、()内の数字は人数

表3 中学校男性教師と女性教師の「生」と「死」に関する教育の必要性の認識

	「生」		「死」	
	男性	女性	男性	女性
必要	90.7(88)	90.9(50)	80.4(78)	74.5(41)
どちらともいえない	9.3(9)	9.1(5)	19.6(19)	25.5(14)
必要ない	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)

(注) 表の値は%、()内の数字は人数

師間に差がみられなかったが、「死」については若干の差が認められた。

3.2.2 年齢階層

表4には、「生」と「死」の教育の必要性を教師の年齢階層別にみた結果を示した。「生」の教育は20歳代が91.7%、30歳代が92.0%、40歳代が83.3%、50歳代・60歳代が92.7%であった。40歳代以外の年齢階層の90%以上の教師は「生」の教育が必要であると回答した。「生」の教育が「必要ない」との回

答はいずれの年齢階層でも皆無であった。「死」の教育についても同様に、「必要ない」との回答は皆無であった。「どちらともいえない」と回答した教師は、50歳代・60歳代の「死」の教育の31.7%が特に高い割合であったが、20歳代、30歳代、40歳代がそれぞれ16.7%、18.0%、20.8%とほぼ同じ程度であった。しかし、「生」の教育については、40歳代の16.7%以外の年齢階層では7~8%であった。

表4 年齢階層別にみた「生」と「死」に関する教育の必要性

	20歳代		30歳代		40歳代		50歳代・60歳代	
	「生」	「死」	「生」	「死」	「生」	「死」	「生」	「死」
必要	91.7 (33)	83.3 (30)	92.0 (46)	82.0 (41)	83.3 (20)	79.2 (19)	92.7 (38)	68.3 (28)
どちらとも いえない	8.3 (3)	16.7 (6)	8.0 (4)	18.0 (9)	16.7 (4)	20.8 (5)	7.3 (3)	31.7 (13)
必要ない	0 (0)							

(注) 表の値は%, ()内の数字は人数

表5 中学校教師が考えた「生」と「死」に関する教育の開始時期

開始時期	
早い時期から行うのがよい	7.8(12)
学年に応じた教育が望ましい	69.3(106)
個に応じた教育が必要なので時期は定められない	15.7(24)
その他	0.7(1)
無回答	6.5(10)
総計	100 (153)

(注) 表の値は%, ()内の数字は人数

表6 中学校教師が考えた「生」と「死」に関する教育の望ましい開始年齢

開始年齢	「生」	「死」
6歳未満	5.2(8)	3.9(6)
6~8歳	28.1(43)	16.3(25)
9~11歳	23.5(36)	21.6(33)
12~14歳	14.4(22)	22.2(34)
15歳以上	0(0)	5.2(8)
無回答	28.8(44)	30.7(47)

(注) 表の値は%, ()内の数字は人数

3.3 中学校教師が考えた「生」と「死」に関する教育の開始時期と開始年齢

表5には、中学教師が考えた「生」と「死」に関する教育の望ましい開始時期の結果を示した。学年に応じた教育が望ましいが最も多かった。本調査では、中学校教師の考える「生」と「死」に関する教育の望ましい開始年齢を求めた質問が用意されていた。その結果を表6に示した。「生」と「死」に関する教育の望ましい開始年齢について「生」の教育の

望ましい開始年齢は、6歳から8歳が望ましいと回答した教師が28.1%と最も多く、次いで9歳から11歳と回答した教師が23.5%であった。「死」に関する教育の開始年齢としては12歳から14歳が望ましいと回答した教師が最も多く22.2%、次いで9歳～11歳と回答した教師が21.6%であった。以上のように「生」に関する教育の開始年齢は6歳から8歳あるいは9歳～11歳でいずれも小学校時代、「死」に関しては小学校高学年から中学校時代と言えそうである。

表7 学校教育活動における「生」と「死」の教育の取り入れ

取り入れている	73.2(112)
取り入れている	26.1(40)
無回答	0.7(1)
総計	100(153)

(注)表の値は%, ()内の数字は人数, 複数回答可

表8 学校教育活動における「生」と「死」の教育の取り入れの現状

教科活動として	57.4(97)
教科外活動として	13.0(22)
外部講師による教育	29.6(50)
総計	100(169)

(注)表の値は%, ()内の数字は人数, 複数回答可

表9 「生」と「死」の教育を取り入れている教科(教科活動)

教科	
国語	4.8(6)
社会	6.4(8)
数学	0(0)
理科	7.2(9)
音楽	1.6(2)
美術	0(0)
保健体育	6.4(8)
技術・家庭	2.4(3)
外国語	2.4(3)
道徳	64.0(80)
無回答	4.8(6)
総計	100(125)

(注)表の値は%, ()内の数字は人数, 複数回答可, 表12の教科活動97名を対象

3.4 「生」と「死」の教育の学校教育活動への取 入れ状況

表7には、学校教育活動に「生」と「死」の教育の取入れられているかどうかについての回答結果を示した。その結果、153名中の73.2%が取り入れられているとの回答があった。全体の4分の3程度が教育に取り入れられていることがわかった。

学校教育活動において「生」と「死」がどのような活動で取り入れられているかについて回答を求めた結果を表8に示した。その結果、教科活動として取り扱っていると回答した教師が57.4%、教科外活動が13.0%であった。外部講師によると回答した教師も29.6%、約3分の1が教科及び教科外活動以外にゆだねていると回答していた。「生」と「死」の教育を教科活動として取り入れられていると回答した教師に、取り入れられているのは、どの教科においてか複数回答

可として回答を求めた。その結果を表9に示した。回答した教師125名中64%の80名が道徳の教科と答えている。道徳以外は、理科、社会、保健体育、国語など多岐にわたる科目で取り入れられていることが分かった。次に、どのような教科外活動で「生」と「死」の教育を取り上げたか、その種類を表10に示した。「生」と「死」の教育を取り上げた教科外活動としては、総合的学習において取り上げた割合が一番多いが、特別活動やロングホームルームといった時間で取り組まれている状況が明らかになった。

3.5 「生」と「死」の教育で希望する教育内容

表11には、「生」と「死」の教育で教師が希望する教育内容について調べた結果を示した。表に示されたように「命の大切さ」とする回答が253名中109名の43.1%を占めていた。次いで自己の確立における「自己肯定感」が21.7%、「豊かな人間形成」が

表10 「生」と「死」の教育に関する教科外活動

教科外活動の種類	
総合的学習	37.5(9)
特別教育活動	20.8(5)
ロングホームルーム	20.8(5)
その他	8.3(2)
無回答	12.5(3)
総計	99.9(24)

(注)表の値は%、()内の数字は人数、
複数回答可、表12の教科活動22名を対象

表11 「生」と「死」の教育で希望する教育内容

内容	
命の大切さ	43.1(109)
自己肯定感	21.7(55)
豊かな人間形成	16.2(41)
正確な知識	8.3(21)
答えのない問いへの探究	5.9(15)
自己決定できる	4.7(12)
	100(253)
回答	95.8(253)
無回答	4.2(11)
総計	100(264)

(注)表の値は%、()内の数字は人数、複数回答可

表12 「生」と「死」の教育で利用した図書の内容

内容	
病気・闘病	23.1(18)
震災	23.1(18)
臓器移植	16.7(13)
交通事故	12.8(10)
安楽死	5.1(4)
インフォームドコンセント	5.1(4)
尊厳死	3.8(3)
自殺	3.8(3)
グリーフケア	1.3(1)
その他	5.1(4)
	100(78)
回答	52.0(78)
無回答	48(72)
総計	100(150)

(注)表の値は%, ()内の数字は人数, 複数回答可

16.2%であった。そのほか「正確な知識」の獲得が8.3%, 「答えのない問いへの探求」が5.9%, 「自己決定できる」が4.7%であった。表11で示された希望する教育内容が具体的にはどのような内容なのかを知るために「生」と「死」の教育で用いられた図書の内容について調査した。その結果を表12に示した。「病気・闘病」と「震災」がそれぞれ78名中18名の23.1%であった。「臓器移植」が16.7%, 死亡や怪我に直結する「交通事故」が12.8%の教師が扱うことを希望していた。また「安楽死」, 「尊厳死」や「自殺」, 「グリーフケア」, 「インフォームドコンセント」などが挙げられていた。

4. 考察

中学校教師が「生」と「死」に関する教育が必要と捉えているか否かを明らかにするために、その必要性についての認識を問うた。教育が必要ないと回答した中学校教師は皆無であった。このことは、教育現場において中学教師らが、「生」と「死」の教育の必要性を明確に認識している結果である。属性との関連でみた中学校教師の考える「生」と「死」に関する教育の必要性については、「生」については男性教師と女性教師の差はみられなかったが、「死」については若干の差が認められた。「死」に関しての教育の必要性に対し女性教師がいかなる理

由で男性教師より低い認識であるのか、また「どちらともいえない」と捉えるのかについてはさらなる検討が必要である。

中学校教師が「生」と「死」の教育が必要であると認識していることが明らかになったので、本稿では、次に中学校教師の考える「生」と「死」の教育の望ましい開始時期と年齢について検討した。中学校教師の考える「生」と「死」に関する教育の望ましい開始年齢について、「生」の教育の望ましい開始年齢は、6歳から8歳と回答した教師が28.1%と最も多く、次いで9歳から11歳と回答した教師が23.5%であった。「死」に関する教育の開始年齢としては12歳から14歳が望ましいと回答した教師が最も多く22.2%, 次いで9歳～11歳と回答した教師が21.6%であった。以上のように「生」に関する教育の開始年齢は6歳から8歳あるいは9歳～11歳でいずれも小学校時代、「死」に関しては小学校高学年から中学校時代と言える。

これは、中学校教師は、「生」の教育を開始した後「死」の教育を行うことを望んでいると言える。

子どもの「死」の概念についての代表的な心理学研究者である Nagy¹⁷⁾は、子どもの「生」と「死」の認識について5歳以下、5歳から9歳、9歳以上という分類をした上で、9歳以上になると「死の不可逆性」や「普遍性」などを認識することができると示して

おり、勝俣¹⁸⁾や加藤と庄司¹⁹⁾の先行研究においては、10歳前後に達すると子どもの「生」や「死」に対する認識が客観的・現実的になることを示している。

中学校教師は「生」の教育に関しては、子どもが何らかの死の概念を認識する、より早い時期に開始し、「死」の教育に関しては、子どもが「死」を客観的に認識できるとされる時期より若干遅めに開始するのが望ましいと捉えていることが明らかになっ

た。「生」の教育を最初にスタートさせ、その後「死」に関する教育を行う新たな「生」と「死」の教育の在り方の可能性を示唆する結果である。

いじめや自殺の問題をはじめ、子どもを取り巻く「死」の問題は複雑で、より重層的分析と検討が必要である。今後の課題は、子どもが直面しうる様々な「生」と「死」の諸問題に対しても有効な実践的な「生」と「死」の教育について検討したい。

倫理的配慮

本研究は、中部学院大学・中部学院大学短期大学部審査委員会の承認を得た（倫理承認番号：E18-0010-2）。

文 献

- 1) Katagiri F : A study on life and death attitudes related to the death and bereavement experiences of university students in Japan: An examination using the death attitudes inventory. *The Journal of Chubu Gakuin University and Chubu Gakuin College*, 16, 13-20, 2015.
- 2) 井上ひとみ, 岡田洋子, 菅野予史季, 志賀加奈子, 荃津智子, 井上由紀子 : 小学生を対象とした Death Education の実践と評価—小学2年生の記述内容の前後比較より—. 石川看護雑誌, 3(1), 65-75, 2005.
- 3) 荃津智子, 小林千代, 井上由紀子, 岩本喜久子, 岡田洋子, 工藤悦子 : 小学生を持つ親が子どもと「死」について話すことの意識と実態. 天使大学紀要, 9, 81-92, 2009.
- 4) 大曲美佐子 : 小学生の死の意識と喪失体験及び自尊感情との関係性について. 教育諸学研究, 26, 3-16, 2013.
- 5) 山田真紀 : 自分の命について考える道徳の授業—生とふたつのアプローチから—. 相山女学園大学教育学部紀要, 6, 325-334, 2013.
- 6) 山梨八重子 : 授業「脳死・臓器移植を考える」—社会科と保健科で取り組んだ授業実践—. お茶の水女子大学附属中学校紀要, 31, 57-69, 2001.
- 7) 仲律子, 丸山真名美 : 「いのちの授業」が中学生の死生観に与える影響. 日本教育心理学会総会発表論文集, 55, 75, 2013.
- 8) 山崎裕二 : 三鷹市・武蔵野市の小中学生および保護者の脳死・臓器移植に関する意識調査. 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, 14, 107-119, 2001.
- 9) 清水美智子 : 子どもは生と死をどのように認識していくか (1) —発達人間学の課題としての死生観の探求—. 大阪教育大学紀要第VI部門, 40(1), 88-99, 1991.
- 10) 清水美智子 : 子どもは生と死をどのように認識していくか (2) —発達人間学の課題としての死生観の探求—. 大阪教育大学紀要第VI部門, 40(2), 255-272, 1992.
- 11) 杉本陽子 : 子どもの「生と死」に対する認識. 日本健康医学会雑誌, 10, (1), 2-11, 2001.
- 12) 大仲政憲 : 生命尊重に関する指導のあり方についての提言—児童・生徒から教員養成大学学生の実態に基づいて—. 大阪教育大学紀要第V部門, 59(1), 15-28, 2010.
- 13) 近藤卓 : わが国におけるいのちの教育—全国実態調査の結果から—. 近藤卓 (編), いのちの教育の考え方と実際, 至文堂, 東京, 45-52, 2009.
- 14) 片桐史恵 : 大学入学以前の「生と死」の教育に関する検討—大学生の学びの経験から—. 中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要, 17, 11-18, 2016.
- 15) 文部科学省 : 小学校学習指導要領 (平成29年告示).
https://www.mext.go.jp/content/1413522_001.pdf, 2017. (2022.11.20確認)
- 16) 文部科学省 : 中学校学習指導要領 (平成29年告示).
https://www.mext.go.jp/content/1413522_002.pdf, 2017. (2022.11.20確認)
- 17) Nagy M : The child's theories concerning death. *The Journal of Genetic Psychology*, 73(1), 3-27, 1948.
- 18) 勝俣映史 : 若者の死生観. 教育と医学, 53(624), 523-529, 2005.
- 19) 加藤良則, 庄司一子 : 「生と死の教育」における Teachable Moment Process の検討—「いのち」に対する児童生徒の認識と教師の対応の検証を通して—. 教育心理学研究, 70(2), 131-145, 2022.

(2022年12月5日受理)

A Study of Attitudes Toward Education on Life and Death Among Junior High School Teachers

Fumie KATAGIRI

(Accepted Dec. 5, 2022)

Key words : Junior high school teachers, life and death, education, perception, attitude

Abstract

This study sought to shed light on how educators approach teaching about life and death by conducting a survey of junior high school teachers about their thoughts on education about life and death. The written survey asked 153 junior high school teachers specific questions on the necessity of education on life and death, when the topic is first introduced, whether it is included in the curriculum of a certain subject or dealt with in an extracurricular context, and so on. Among the study results, when asked what would be the ideal age to begin education on life, the largest number of respondents, 28.1%, answered ages 6 to 8. The second largest group, at 23.5%, answered ages 9-11. Asked what would be the ideal age group in which to introduce the topic of death, the largest number of respondents, 22.2%, answered ages 12 to 14, while 21.6% of respondents, the second largest group, answered ages 9 to 11. The study indicated that junior high school teachers found it ideal to begin education on the topic of death after first covering material related to life, which points to the existence of a new paradigm in education on the subject of life and death.

Correspondence to : Fumie KATAGIRI

CHUBU GAKUIN College

2-1 kirigaoka, seki-shi, Gifu, 501-3993, Japan

E-mail : fumie@chubu-gu.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.32, No.2, 2023 385 – 393)